

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 3 NO.1

昭和51年7月10日発行
編集・発行人 市原 正夫

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311(代表)



香取秀真「靈獣文大花瓶」(部分)

観潮台

日曜日と祝日に限り、国鉄千葉駅と美術館の間を往復するバスが、おそくも夏中には走り出す見こみと聞き、美術館利用者にとっては福音と感じ、二年余の願望が一日でも早くと念じている。

美術館利用者のための条件整備には、意外なほど時間がかかるものだが、バスとともに大きな課題が、美術館周囲の整備である。外構工事ということだが、県民の美の広場として、すでに展示棟と管理棟があり、さらに美術普及棟が計画されている現在、この外構工事も平行的に具体化したいと期している。

美術館は東京湾の埋立地にあるが、植物生態学の原理を生かして森を造成して包み、「屋根のない美術館」に構想を拡大し、芝生には象徴的な彫刻を配置して、美への導入空間を設定したり、また「歩道彫刻展」にも開放したい。夢のような森への道は開かれ、千葉ライオンズクラブ、美術館友の会、篤志家などの寄贈植樹がはじまり、「屋根のない美術館」への可能性もいまま心強く予感しているが、さらにご支援を願いたい。

(高橋在久)

浅井忠と その師弟展を おえて

昭和五十一年三月二日から四月十一日まで「浅井忠とその師弟展」を開催したが、以下、特別展を総括してみたい。

展示の構想

展示の主題が「浅井忠とその師弟展」のとおり、①浅井忠の日本とフランスでの、油彩・水彩・素描その他代表作約八十点。このなかには、国指定重要文化財の「春畝」や「收穫」をはじめ、「グレー」の洗

濯場」や「グレーの橋」などが含まれていた。②少年期の日本画の師黒沼槐山と工部美術学校の師フォンタネーシの作品。③指導を受けた都鳥英喜、倉田白羊、石井柏亭、斎藤与里、黒田重太郎、安井曾太郎、津田青楓、霜鳥之彦、梅原龍三郎の作品。④浅井忠の生涯と芸術をしのばせる日記、書簡、著書、スケッチブック、交友録、写真、日本画、彫塑、図案、工芸の諸作

美術館に赴任して、はや三ヶ月、この間大勢の方とお会いし、これからの美術館について御意見を伺い、私自身も語ってきた。

懸案の管理棟が完成し、現状の中で「つくる」活動をと、七月には絵画実技講習を開催するべく準備を進めている。

なお、版画実

技講習も計画されているがこれらの反響をみて、さらに事業を拡充せねばと考えている。そのような中で彫塑・工芸等の実技も出来る美術普及棟の必要性が、切実な問題になってくるのではないか。

こんな美術館に

館長

市原

正夫

「みる」活動は美術館の本命であるので、常設展示を継続的に行うことにし、特別展も利用者が長蛇の列をなすようなものやってみたいと思っている。

「かたる」活動でも、現在の解説会という一方的な説明形態から、鑑賞会（美術を語る会）へと発展して、作品を見ての感想を卒直に話し合い、作品の見方を主体的に深めるようなことも考えてみたいと思っている。

また、美術館は作家や作品、各種展覧会・美術出版物等に

関する情報センターでもあるので、この面のいろいろな質問や相談にお答えするほか、美術関係の図書・新聞・雑誌等を自由に館内閲覧できるようにすべきである。美術普及棟はそのための施設でもある。

一方、美術館は館全体の環境が大切でないかと思う。幸い約

三万三千㎡の敷地をもっているのに、計画的に造園をすすめて、樹木の植栽のほか花卉園、園路、ベンチ等に加えて、彫刻作品等を屋外展示し、格調のある庭園として、美術館全体を心の憩いの場としたい。

品などの多彩な資料を、関係各位の協力をいただき展示公開した。

大きな反響

こうして、①②③の作品を一室に展示し、④を別に浅井忠資料室を設けて公開した。

ありがたい報道として、日本のバルビゾン派、浅井忠とその師弟展（「日経」百余点を初公開、日本人の洋画習得の姿勢にも視点、浅井忠とその師弟展（読売）などの紹介と評価をはじめ、千葉日報では「近代洋画のあけぼの」という連載まで企画され、大衆化を促してくださった。

反響は多大で、県内各方面からの参観はもちろん、東京都をはじめ首都圏各地から、また、浅井忠ゆかりの京都方面からも、連日多くの人たちを迎えたが、平行的に隈元謙次郎氏らの講演会と解説会を開き、盛況のうちに無事に「浅井忠とその師弟展」を完了した。この間、福島県いわき市で浅井忠の描いた肖像画が発見されたり、秘蔵の浅井忠遺品が本館に寄託されるなど浅井忠を再発見する絶好の機会にまでなった。

特別展の反省

浅井忠と日本の近代洋画というテーマは、あゆみ始めた千葉県立美術館の主要な課題先駆的な足跡を見直し大衆化をすすめたいと念願した。

こうして、展示資料としては、黒田清輝と並ぶ近代美術史の巨匠の画風の系譜と影響を浮き彫りにした（読売）というありがたい集大成が実現し、さらにこの展示から「黒田の系統が主に官展を形成していたのに対して、浅井の系統は旧二科を中心に、在野をつくっていったのは興味深い（サンケイ）」という近代美術史の流れまでも見ることができた。

なお、展示資料には浅井忠の生涯を理解する上で重要な背景資料も同格に扱うことにしたが、「近代日本人画家の西洋画習得の姿勢という点にまで焦点を意欲的に広げた（読売）」という評価までいただき恐縮した。とにかく、「五十一年」という決して長くない生涯において、浅井忠が日本近代洋画の発展に大きな役割を果たしたことが理解されることを念願して、作品群と背景資料の立体的展示を実行してよかったと思う。

環境との対話

市民参加へ

県立美術館の新たな使命

長谷川 栄

はじめに

静かなたたずまいのグレー村は、エコール・デュ・ルーヴルの博物館学課程に留学していた一年の間にたびたび行った、想い出深いところである。なかでもぶどう酒を何本も積んだ私の車で、隈元謙次郎先生のお伴をして浅井忠のスケッチ跡をさがしつつ、ポルドー酒の味を楽しみながら、モレーからグレーへの道のりをドライブした記憶はきのうのことのようによみがえってくる。こんどの浅井忠展は、私にとっては滞仏のあいだのどくべつの印象とむすびついて一層感傷をさそった。美しいフランスの田園風景が、さながら時計の針が止まったように、

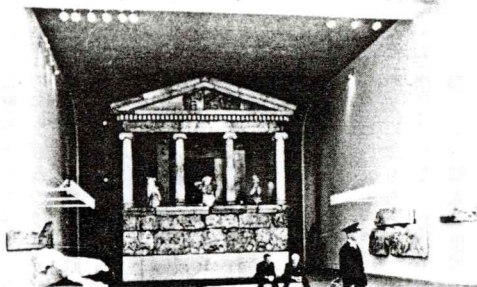
一世紀ものあいだ静止している環境について、みなさんも驚きの眼でご覧になったにちがいない。そしてそれがなぜ日本に求めることが難しくなっているのか……と疑問をもたれたであろう。幾世紀にもわたる民衆の風景への投資の蓄積が、このようにさりげなく美しい環境の保存を成功させたのだが、もともと山紫水明の空間を尊重したかつての日本人がいまではすっかり姿を消してしまっただけであらうか。われわれは、さいきん「環境」についてあまりにも鈍感になってしまったような気がする。

環境を生かす美術館

千葉県立美術館の位置は千

葉市の海岸で、人工的な大型石油コンビナート群のまっただなかにあつて、美術館としてはやや遠慮がちに、小さい容積を占めている。それは、コンビナートのダイナミックな現代の造形美があまりにも立派すぎ、近代的センスにアップビルしているからこのようにみえるのであらう。ステールによって構築された巨大な幾可学的形態のタンクや構造物のほうに、なにか前衛的な表現力もち、美術館が

「環境的にスツキリと研修された大英博物館」



それと無縁であるという公害源を拒絶する姿勢を示すよりは、このコンビナートを舞台に前衛野外劇でも計画されたら、いまの産業を優先する日本文化の構造の肯定のうえにたつ環境美化が可能となるのではないかとおもった。また海のエネルギーを吸収しての海洋博物館の計画や、美術館を含めての臨海公園のプランもいかなものだろうか。この美術館は、いまこうした環境の優秀さに無頓着なように、その壁を境界にして、コンビナートとはまったく無縁な、

どこの美術館でもやっているような絵画や彫刻や伝統工芸などの展示をおこなっていた。一般にフランスの文化会館や美術館の活動は、まずその位置の最大限の対応と発揮のしごとからはじまる。パリと英仏海峡の中間、アミアン文化会館は、現代演劇という特色を打ち出しナンシーとともにそこに具わった文化意識を基礎にしている。グルノーブルは、一九六八年の冬期オリンピックによる斬新な都市計画を課題に、その文化会館では永年にわたりその現代ウルバニスムのありかたを追究している。トゥール美術館博物

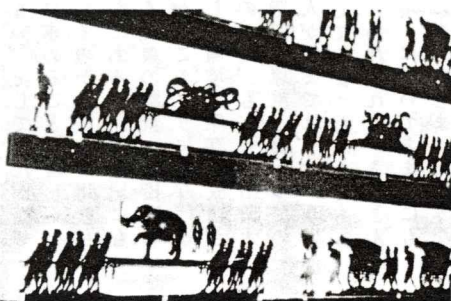
館は、フランスの貴族の庭といわれるトゥーレーヌ地方を広域の博物館とみだてての美的演出の要衝である。ソンのエ・ルミエール（音と光の詩劇）が壮大な貴族のシャトーでおこなわれるが、千葉県立美術館でも千葉県の特色を生かして、海岸とコンビナートと美術館と連絡する野外演劇や現代舞踊でも実施したらいかかなものかなと夢想する。シュノンソーは、いまでも野生の鹿や兎が出没する原生林に囲まれた巨大な城で、夜になるとサーチライトで色彩と光の変化のあたえられた城で、詩の朗読がおこなわれる。俳優のジェラルド・フィリップが生前テープに吹込んだ、この城にまつわる三人の妃のストーリーは、周囲数軒の深い森にこだまして圧倒的な詩境にいきなう。

個人的な美術鑑賞

日本の美術館が、その多くは周囲の都市空間や壮大な環境と無関係に運営されているのは、日本美術の多くが矮少なスペースしかもち得なかつた体質によるからであらう。

大陸文化のイミテーションから室内の芸能文化の所産である茶の湯とか生花、あるいは近代以降設定された美術団体展での格付けや画壇の権威を意識しすぎるからであらう。また美術批評の方向が外部空間への発展に関心がなかったためもある。さらに近代の日本の美術行政が文化財の「保護」に重点を置いていたので、伝統的に「提示」の哲学が育たなかった面も指摘されよう。これは明治初期に移入されたヨーロッパの方法が現在も踏襲されているからかもしれない。これらの伝統の負いを受け、日本の美術は、公開展覧会という場にまだ不慣れで、昔から床の間という特定の空間を前提にしたものであった。僅か一世紀ほどまえ、厳密には、明治六年のウィーンの万国博への日本参加以前には、まったくわが国には公開展覧会の習慣さえなかった。公共コレクション(collection publique)という公共施設での美術品収蔵の習慣もなく、それまでは箱書きのある桐箱という陰微な格式の狭い空間の中から超個人的に、美術品をとりだし幽やかに鑑賞する「公開」を拒否した。個人コレクション

「児童にも親しみのある展示を（パリ国立民俗芸術博物館に展示の影絵芝居）」



のリレーションのみあった。この室町期の「君台観左右帳記」的な、格付けの習慣が、意外にも現代生活の中に根強くのこっているのである。各県の美術館では、保守的な「小日展」、「小伝統工藝展」などといわれる「県展」、「市展」の開催を余儀なくさせている。それぞれ、地縁の作家たちが作品をもち寄り、杜中展的なムードを昂め、その地域の水準を向上させるのに役立っていないとはいえないが、展示をつうじて察するかがり

では歴然とした序列が存在し、この殻を破るのは容易ではないことが知られる。昨年、東京都美術館を中心に長期間争そわれた東京展とN展のヒステリックな会場争奪戦はそれをよくものがたっていたし、そのことに注意がそれて、おかげで現代美術館としての機能を考え設計に反映する重要な検討を遺失してしまつたらみがある。

欧米にはもちろん、こうした格付けがないわけではなく、（参照—「職人の世界」NHK海外取材班編著、一九七六・二・二〇発行）フランスの職人秘密結社コンパニオンのように日本よりもむしろ因襲のつよい封建的組織の支配さえあるが、それを現代美術に反映することの功罪を見分けるインテリジェンスないしは、現代文明意識は持ち合わせているようである。矮小な仲間意識に蔽われているあいだ、真の意味の現代美術の発展はあり得ない。

友の会が育てる

美術館

また公共コレクションを充実しようという、大衆の側の

援護の姿勢が顕著にみられるのも、欧米の美術館をとりまく環境の大きな相違点である。館ごとにある友の会組織ではわが国の多くは友の会員側からみてサービスをうける受益団体であるのにたいして、欧米では逆に美術館への援護の団体となる。

たとえば、ルーヴルの友の会では「会員は国のコレクションを豊富にさせねばならない」のスローガンを第一に標榜し、美術品の大々的な寄贈と購入費の援助を積極的に進めている。もちろん文化的行事の数と規模も格段に大きく、各館を横に連絡しての講演会、見学会の開催も活発で、とくにジェット機や汽船を借切つてのエジプト、ギリシャ、ローマ遺跡の見学旅行はすばらしい。またこうした企画に参画する博物館大学（四年制）も、わが国にはまったく存在しない教育機関で、美術史、考古学、博物館学を学ぶ学生が約五千人、将来の美術館運営を見ざして研究している。

（ルーヴル友の会、大学については博物館研究誌参照）

環境と握手した

美術館

前述のように千葉県では、石油産業基地のイメージが強い。そこで、その公害源とみなす拒否の姿勢をもつより、現実の肯定にたつた地域との交流が必要となろう。

産業と芸術との握手の例をみると、タイヤ・メーカーのミシユランのロードマップの功績があげられるであろう。ミシユランで詳細に調査し、夥しいシリーズで発行しているグリーン色の自動車用道路地図には、古美術遺跡や美術館やシャトーや、民族芸能や地方の特色ある風俗、習慣、食事へのガイドと詳細な解説で満ちている。どこかの国の観光・温泉・レジャー案内のみのロード・マップと大違いだ。このミシユランの地図の企画・調査・編集の蔭に多勢の学者たちの地道な協力が察せられる。

わが国では、自動車の大衆の生活における知的な使われかたの指導がなされないまま増産され、巷には車があふれ類型的な観光地には人混みの悪夢のような状況が現出している。こうした困惑した大衆

に誰ひとりとして、手をさしのべようという産業界のプレインはいまのところ見あたらない。

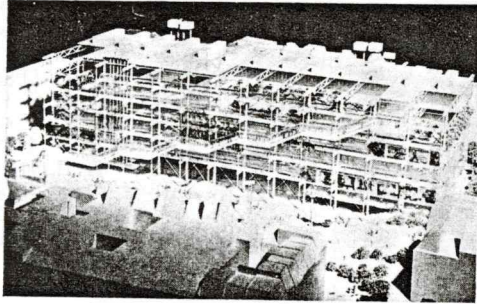
さて、私はいま、静かに流れるロアン川のほとり、グレイの村の石橋の傍らにある洗濯場へと回想をさせている。ここには磨きのかかった環境へのひたすらな愛情がみえる。

のみならず、電気洗濯機の普及したいまでも、石造りの、用途の終わったクラシックな洗濯場を頑固に守っているその対岸には、緑の野生の草花に蔽われた岸辺に、青少年や家族たちに開放された野外キャンプ場がキッチンと整備され、モダンなトイレや標識が風景に調和してたっている。風景美の伝統を護るだけでなくここには商業化されない、健全な「現代」へのリエゾン（橋渡し）が、高度な文明意識のうえからおこなわれているのを知る。

こんどパリの中心に開館する、故ボンビドー大統領の企画になる、「国立芸術文化センター」にしてもそうである。「市民参加」を大前提に、各芸術メディアを連合して体験できる都市空間的な芸術の場として、現代芸術のパイロッ

ト的施設として出発する。ここでは五百億円の子算と六十億円の年間運営費と九百人のスタッフで、アクアポリス状

「美術館は市民の広場だ
（未来をめざすパリ国立芸術文化センター）」



の現代的建物のなかで、絵画・彫刻・工芸・詩・音楽などの各芸術メディアの隔壁をとりこわしたフレキシブルな透視的空間のなかで、ジャンル相互の干渉、内部と外部空間、文化の場と社会の場とをフリーにコミュニケーションしようという計画がみられる。TVスタジオが設備され、国営ラジオ

・ハウスの電波にのって行事が茶の間と直結され、外国の美術館とも同時放送によって行事提携する実験も計画されている。

パリ国立芸術文化センターの詳細については「近代建築」一九七六・一月号参照

美術館は 市民の広場

こうした未来的な提示の背景を流れている、現代芸術把握と「市民参加」の思想をあらためて分析、比較してみると、かつてわが国の芸術運動ないしは市民運動というものが、いかに幼稚であり巨視的な視野に欠け、商業化され、コンセプト不在であったかを知らされる。

千葉駅前からひろった構内タクシーが、美術館の場所がわからず警察で道をきき、何度も迂回したあげくやつとおもいでこの千葉県立美術館にたどりついた。この、私の初めての県立美術館との邂逅の偶然的印象が、この美術館の活動を象徴しているものでないことを祈りながら、このペンをとったしだいである。

団体展

▼現代書道五十人展・千葉書壇秀技展・現代書壇代表名作展・千葉書壇新進展
7・20～7・25 無料

▼第六回いってふ会彫刻展
8・3～8・8 無料

▼「家庭の日」ポスター・標語展
8・17～8・22 無料

▼千葉市教職員美術展
8・24～9・25 無料

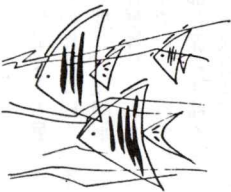
▼第2回問われる表現展
9・7～9・12 無料

▼千葉県拓本展
9・21～9・26 無料

▼第8回ファンシー洋画展
9・28～10・2 無料

▼第6回新構造千葉県支部美術展
9・28～10・3 無料

▼千葉市水墨画同好会展
10・5～10・10 無料



（東京国立博物館学芸部
企画課展示調整室長）

展覧会案内

常設 収蔵作品展

〈第二期〉

7月1日(木)～8月1日(日)
9月1日(木)～9月15日(木)
11月20日(土)～12月25日(土)
月曜日休館・無料

常設展示は美術館のベースとなる展示活動ですので、できるだけ早期の実現をはかってきました。ようやく収蔵作品も充実してきたので本年度からは特別の事情のない限り年間を通して作品の鑑賞ができるように常設の展示室を

子どもの絵展

7月27日(火)～8月29日(日)
月曜日休館・無料

昨年に引き続き今年も夏休みを利用して開催されます。子どもを対象とした展覧会としては、全国でも屈指の大きな団体である全国教育美術振興会から、優秀作品三〇〇点を借用して展覧し、絵画に対する子どもの関心を高め、

設けました。

前年度まで、近代房総の美術家たちシリーズによってすでに紹介してきた、浅井忠とその師弟・原勝郎・椿貞雄・石橋武治・若木山・津田信夫に、今回初めて国際的版画家として著名な浜口陽三を加えた作家コーナーの他に、日本画・洋画・彫塑・工芸・書の秀作を選んで展示しております。年間を三期に分けて作品の展示替えを行ないます。今後とも秀れた美術作品の収集につとめて、展示内容を充実させていきます。

美術教育の振興に寄与したいと考えている。

子どもは、自分の目に映った世界を素直に表現する。興味をもったところを大胆に描き、迷いながらも一つの世界を築き上げる。そこには空想の世界・色彩の世界などが広がる。精いっぱい自分の描きたいものを描き、描くことが子どもにとって楽しい時間であったことがわかる。

文化庁買上

優秀美術作品展

8月7日(土)～8月26日(木)
月曜日休館・無料

本展は、昭和四十一年～四十九年度、文化庁買上げ美術作品で、日本画・洋画・版画・彫刻の部門からなり、洋画部門は、北川民次・画家の家族、国領経郎・砂の上群像、日本画部門は、加山又造・春秋波濤、橋本明治・女優、版画部門は、吉原英雄・シーン

一、木村光佑・現在位置一存在C、愛囀・Well Well Well Rainbow Volcans、彫刻部門は、大内青圃・風神雷神、朝倉響子・ともえさん等の作品を含めて、六十六点の作品を国公立美術館と文化庁が協力して、優れた美術作品を中心に有意義な美術展を企画し、公立美術館に巡回展示して地方における美術の振興普及に資する美術展である。

この優秀美術展の中に、千葉県在住の作家、大須賀力、「若き女」(彫刻)、加倉井和夫「礎と少年」、松尾敏男、「樹海」・後藤純男「残照」(日本画)

等の優れた作品なども展示され、これらの作品は四十一年～四十九年度に、国際展、個展、各団体展等に発表された優れた作品である。いずれにせよ、各部各派の作品を一堂に集めてみる機会は、そうざらにあることではなく現代日本の実状を知る上にも興味があり、いろいろ／＼な角度から意義ある展覧会といふべきであろう。

香取秀真とその周辺展

9月21日(火)～10月24日(日)・月曜日休館
(9月23日、10月10日は開館)
一般 200円 (150円)
大・高生 150円 (100円)
中・小生 100円 (50円)の予定
()内は団体20名以上

その秀真の作品を中心に子息香取正彦、師の大島如雲、同志の北原千鹿、佐々木象堂門下の魚住為楽、内藤春次、長野埤志の鍔金作品、また、秀真が文士村といわれる東京田端に工房を構える機縁となつた盟友板谷波山の陶芸作品を展示する。

その他に、香取秀真が日本の金工史を研究したその成果の一端を示す著作類と正岡子規の友人として、アララギ派歌人として活動した短歌なども併せて展示する。

本年度の特別展として今回は日本近代美術史の流れの中で本県にゆかりの深い香取秀真とその周辺にスポットをあて、秀真の真価を見直し、広く県民に理解していただくために開催するものである。

香取秀真は明治七年(一八七四)、千葉県印旛郡船穂村



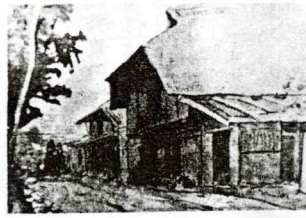
新収蔵資料紹介

昭和五一年二月 五月

購入

浅井 忠作

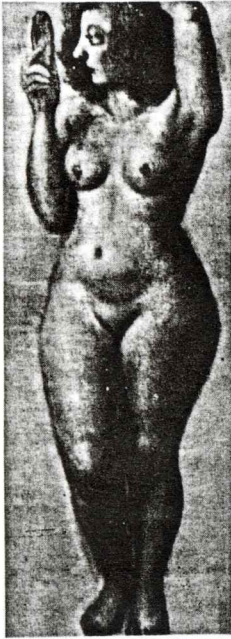
「沢入駅」 「スケッチブック八冊」の九点



椿 貞雄作

「アンドレ裸体」 「横堀角次郎兄像」の二点

アンドレ裸体



霜鳥之彦作

「ロシアの女」の一点

ロシアの女

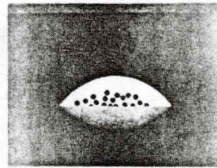


横堀角次郎兄像

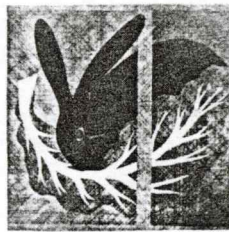


浜口陽三作

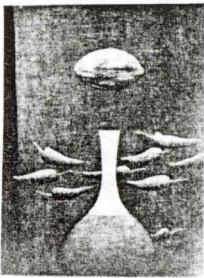
「赤い鉢と黒いサクラランボ」 (銅版画) 「うさぎ」 (銅版画) 「ピーマンのある静物」 (銅版画) 「びんとくるみ」 (銅版画) 「びんとサクラランボ」 (石版画) 「赤い鉢」 (石版画) 「ブラジルの太陽」 (石版画) 「てんと虫」 (石版画) の八点



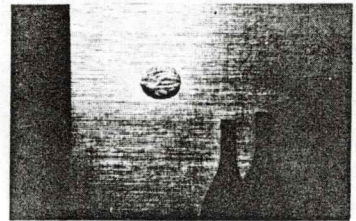
うさぎ



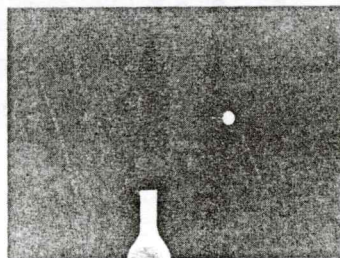
ピーマンのある静物



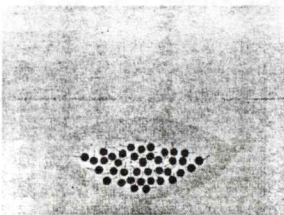
びんとくるみ



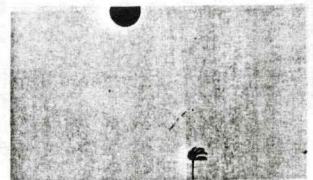
びんとサクラランボ



赤い鉢



ブラジルの太陽



寄贈

三月三十一日、霜鳥之彦氏より左記二点御寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

青いセーターの女



秋果



花瓶大文獣霊

刻印「秀真作」

香取秀真
(明治7年～昭和29年)
1874～1954

本館が収蔵する霊獣文大花瓶は総高四五・五センチ、胴張四二・七センチ、口径二一・二センチ、口縁部の厚さ一・一センチ、底径二〇・〇センチの大きさのもので香取秀真の作品の中で梵鐘を除くと大作に属するものであり、高さ三〇・六



センチのところに七・五センチの巾で装飾が付けられている。この帯文は八個の括の中に霊獣を浮き出し、四個は二匹ずつが陽鑄されている。他は一匹で前むきのものでとり返る霊獣とが交互に組まれ、霊獣の陽鑄されている間は、菱形の連続模様を陽鑄している。上下の帯の間には、三二個ずつの飾りをつけている。この模様の様式は福寿文銅花瓶や、子息の国讃之壺にもみられ、日本の伝統的なものである。

【お知らせ】

絵画実技講座

鉛筆デッサンから水彩画まで

・期日 昭和51年7月30日(金) 8月1日(日)

・時間 午前10時～午後4時

講師 戸田健夫氏(水彩連盟会員・千葉大学助教)

募集人員 40名

・期日 昭和51年8月21日(土) 8月22日(日)

・時間 午前10時～午後4時

講師 武内和夫氏(千葉大学教授)

募集人員 40名

解説会

・文化庁買上

優秀美術作品展

8月14日

・香取秀真とその周辺展

10月2日・10月16日

の各土曜日2時より行います。

植木の寄付

6月7日榎本正三氏より、黄金ひば39本他22本の御寄付がありました。厚く御礼申し上げます。

千葉県立美術館
協議会委員決まる

去る6月28日、教育委員会において館長の諮問機関である協議会の委員が左記の通り依囑されました。

相川 勝衛

千葉県高等学校長協会副会長・千葉県立木更津高等学校校長

浅見 喜舟

和洋女子大学教授

遠藤 健郎

画家

郡司 幹雄

千葉県文化財保護審議会副会長

笹岡 了一

千葉県美術会理事長

鈴木 秀一

千葉市教育委員会社会教育部長

鈴木 民三

千葉県社会教育委員会議議長

野口 貞子

千葉市婦人グループ連絡会会長

牧田 茂

日本民俗学会理事

八代 進

千葉県小学校長会副会長

千葉市立新宿小学校校長

バス運行の見通し

大分遅れておりますが、道路問題も解決し東京陸運局へ申請中です。一日も早く認可になるよう努力しております。

日誌抄

51年3月～5月

3月

千葉市民展始まる。

書星弥生展、全日写真展始まる。

4月

松戸館長離任式、市原新館長着任式を行なう。

講演会「浅井忠とクレイ村」高橋副館長

浅井忠とその師弟展の解説会 米田学芸員

歩会彫刻展始まる。

千葉工芸会展始まる。

第1期常設展始まる。

5月

白扇会展始まる。

藤野天光展始まる。

県博物館協会総会開く

研究発表・佐藤信夫副主査「藤野天光展の企画から展示まで、および天光の芸術」

友の会バス見学会―下総の文化財と美術品を訪ねて

千葉二科展始まる。

友の会総会

藤野天光展の解説会・佐藤信夫副主査

23

29 25

20 18 11

10 13

3

1

23 10